

# 現場から芽ぐむ研究



栗田成子

## 一、日々のよりよい保育をめざして

くる日もくる日も子どもたちと取り組みながら、いつまでたっても、わからないことや困ったことにはぶつかりつづけています。自由遊びの時、Ｔ子とＯ子が一生懸命におままごとをしている。それに耳をかたむけると「あたし〇〇先生よ。」というＹ子は、こわい顔をして「誰ですか。おいたばかりしているのわ」と、くりかえしている。まったくハッとさせられる。またある時は、計画をしてきたふね作りをさせたとき「先生できない」という子どもが続出して悲しい思いをした。はじめはみんなが、あんなにおもしろがってやりはじめていたのに、何が子どもたちの障壁になったというのだろうか。またいつだった

か、これならばきつと子どもたちは喜んで聞いてくれるだろうと期待していったお話に子どもたちがさっぱり興味を示さず、いらいらしたり、がっかりしたこともあった。長い保育の経験で自分には子どもがわかっていたつもりでいたのに、それがまるで、うわづまべりの理解であったことを思い知らされたのだった。

こうしたことにはぶつかるたびに、私たちはより深く子どもについて考え、自分の指導について反省するのです。

私たちには毎日の保育のなかで問題にぶつかり、とっおいつることがいろいろとあります。おしゃべりの子どもをどうしてだまらせ、反対に一言も物の言えない子をどうして元気にしてやったらよいか。すぐに女の子をたたいたり、がむしゃらの

乱暴をするM夫をどうとりしめたらよいかなどなど、こうした問題について、同僚の経験や知恵をかりたり、専門家に診断をいただいたり、親とも相談したりしながら、日々の保育をよりよいものにしていくことが、とりもなおさず、私たちにとっての研究ではないだろうかと考えています。私はハッとしたり、困ったりした場面におつかった時には、それを簡単にメモをとっておくことにしています。誰が、いつ、何をしたか(言ったか)という極く簡単なものです。それが仲間と話し合う時や親と相談する時に具体的な資料を提供してくれます。そればかりでなく、それを一年、二年と続けた後、一人の子どもについて整理してみると、その子の姿や伸び方がはっきりとかび上ってくることもあります。

## 二、計画だてた保育の実践と評価をとおして

私たちは毎日の具体的な子どもとの取り組みのなかで、いつそうたしかにひとりひとりの子どもを理解し、それだけよく深く自分の指導技術をみがいていくことにつとめていきますが、それとともに、日々の実践を一そう科学的計画的にしていくことがたいせつだと考えています。

子どもを理解するにも、ゆきあたりばったり主義ではなく、あらかじめ家庭調査をしたり、健康記録をとったり、知能テストや興味テストを実施したりして、科学的方法にもとづく理解につとめています。

それによって、表面の言動だけで子どもをよい子と悪い子にわけようとする軽率なことにおちいらず、表面の言動があらわれてくるものわけを考え、このわけに応ずる指導の対策を研究することにつとめます。

家庭のあり方が特に子どもの人間形成に影響しているように思います。祖父母の権力が強い家庭、大商店で傭人など同居人が多い家庭、忙しさに追われるあまり、すべてを幼稚園に依存しようとする家庭などの子どもは、とかく注意力が散漫で仕事が永続しなかつたり時として非常に暴力的にふるまう傾向があります。

研究所にいつて強度の非社交性と診断されたY子の母親はこんなことを言っていました「大事にしすぎていると言われまして。よくわかっているのですが、でも、子どもが家でちょっとでも泣き声をだすと、すぐに祖父母が怒るものですから、つい皆でいろいろと気を変えようように、子どもの気げんをとってし

まうのです。」

それでは結局子どものためになりません。

私たちは子どもの育っている背景や子どもの持っている力を出来るだけ客観的につかんだ上で、自分の受け持っている子どもをよりよく伸ばして行くためにふさわしい保育計画をたてることに努力します。私たちは、生活目標、健康、言語、リズム、絵画、製作、自由遊びとわけ相互の関係をもった計画をたてますが、計画をたてることとともに、その実施の状況を記録し、検討することがよりたいせつであると考えます。

そこで保育日誌を教育目標、指導計画、実施準備実施状態、反省記録にわけて記入するようにしています。

私どもの、三年保育の年長組は最近になってグループ遊びが活潑になり、仕事も興味があれば長く継続できるようになったので、グループで「花屋さんごっこ」をさせることにしました。その中ででの共同製作の「看板づくり」のときでした。花の製作はみんなが創意を出してかなりよくやりました。看板作りもほとんどの子どもは積極的に参加していました。例えばFは仕事をよくのみこまないでちょこ手を出してSに注意をうけているなど、またグループワークができない子もいるので

す。それに全体として糊をつけた後、指に糊をつけたまま他の作業にうつる子が多く、あちこちでもたもたしたり、イライラしているのです。そのためにでき上りもごたごたしてきます。

はじめから糊のそばに布切れを用意して指をふくことを指示しておくべきだったと反省させられました。共同製作はできるだけ気持よく、かつ立派にでき上るよう配慮して、「ぼくたち、みんなでつくったんだ」という成功感を最高度に子ども自らが味わえるよう、そうして次にもやってみようという意欲をおこさせるようにすべきでした。私はFのような子どもの位置づけ方や、仕事の手ぎわよいだんりに工夫が足りなかったことを反省しました。

子どもの状況をつかんで保育計画をたてること、計画のめざす目標が達成できたかどうかを反省、検討すること、さらに次にこの経験にもとづいてよりよい計画をたてること、こうしたことが現場の生きた研究であるということを痛感しています。

### 三、組織された研究会にでて

私は今私立幼稚園の研究会に参加しています。毎月一回〜二回、それぞれの領域に分かれて話し合いをしています。

ここには都内のいろいろな地域の幼稚園の先生がこられているので、私は現場の研究をすすめながらどうしてもわからないことを資料を携えていっては教えていただいたりしながら、そのうちに幼稚園にある地域の差も見出すことも出来ましたし、保育のうえでの悩みもどこの園にもある問題として皆で解決法的一端を考え出したりしました。

でも折角の集りの会ですからもっともっとと活潑にみんなが気になる発言ができるとよい、と思うことがときどきありました。

よその幼稚園の先生とお話しているうちに、自然物や廃品物を上手に利用して保育をされておられる先生もありましたし、教具や図書がもっとほしいとうたったえられている先生も何人かありました。

みんなで協力して、サークル研究会毎の教具や図書の貸し出し機関を設けたり、展示会を開いて保育の成果を発表し合っているながら研究会を強化して、一方専門の先生をお招きして私たちの教養を高めていきたいというのが私ののぞみです。

#### 四、研究を進めていくことを阻む条件の克服

私たちが何とかしたいとのぞみながらも、一級の園児の数が多すぎたり、施設や教具が不完全だったり、雑用が多くて時間がとれなかったりして、いらいらしてしまうこともたびたびあります。

でもこれらの阻む条件を何とかして克服していかなければ、よりよい保育をのぞむことができません。

私たちのやっている事柄たちに知ってもらって出来るだけ協力してもらうことも一つの解決方法ではないかと考えますし、一方全職員の協力、経営者の理解がなくては出来ることはありません。合理的に仕事を処理して、時間的余裕をこしらえ、研究的な態度をもちつつつけていきたいと思っています。

(神田寺幼稚園)

